

研修報告書「写真コレクションによる展覧会づくり」

(「20世紀の写真芸術 学生がつくる大阪新美術館建設準備室・enocoのコレクション」展)

二川 美知枝

はじめに

この研修に参加するきっかけは、たまたま SNS で見かけた enoco の募集告知でした。締切3日前に気づき、大学に無理を言って準備した書類を直接大阪市文化課へ持ち込む慌ただしい応募になりました。社会人大学生として写真を学びながら学芸員課程に籍を置いている立場としては、ぜひとも参加してみたい魅力的な企画だった事もあり、思い切ってチャレンジしてみる事にしました。

(1) 展覧会作りについて

7月2日(日):オリエンテーション

この日が学生達の初顔合わせで、今後の活動についてのオリエンテーションが行われました。展示を9名の学生で担当する事になり、私は社会学を学んでいる学生の方と一緒に、ヨーロッパの前衛写真について担当することになりました。元々希望した内容でしたが、短い期間で共同で企画書作業をする事への不安もありつつ、展示への期待もより具体的



になった1日になりました。

7月24日(月):企画書提出日

顔合わせから、初回の企画書提出まで、あまり時間も無く、私が平日はフルタイムでの勤務と土日は大学の授業や他のイベントの為の作品制作があった為、摺合せに苦勞しながらの企画書提出となりました。実際に会う時間が取れなかった分、それぞれが担当する区分について研究し、メールやLINEを駆使してやりとりを進めました。私は写真史的な見地から、チームメイトは歴史の見地から研究を深め、自分たちの方向性を模索し企画案を固めてゆきました。

7月29日(土):事前講演会と中間発表

吉田忠司氏による大阪における写真史についての講演後、学芸員の方や江之子島文化芸術創造センターの方達の前で企画内容のプレゼンテーションが行われました。発表後20世紀ヨーロッパの戦争や革命などの歴史的な背景に内容が偏りすぎではないかという事、各地で開花した前衛的な芸術文化をどのような形でまとめて展示するかなど、方向性や詰め

のような形でまとめるかを考え、10月中旬までに「イタリア未来派」、「バウハウス」、「ロシア構成主義」という3つの芸術動向を軸に、それぞれの違いと共通点などを考察し、企画案としてまとめる事ができました。

11月21日（火）：搬入作業日

翌日からの展覧会を控え搬入作業が行われました。レイアウト図面を会場と作品サイズを計算して作成していたにもかかわらず、実際に壁に展示する前の段階で観るのに窮屈な事が判明し、予定よりも展示点数を減らす事になりました。図面上と実際では違う事も多く、現場での臨機応変な対応が求められ、よい経験になりました。

12月10日（日）：大学授業の手伝い

在学している京都造形芸術大学写真コースの授業で展覧会を見学する事になり、研究主幹の菅谷さんが解説をして下さる事になりました。また担当した「第3章 宣言するモダニストー激動するヨーロッパの写真新機軸ー」については私が説明をする事になり、後輩学生30名程の前で、今回研究した20世紀ヨーロッパの芸術写真の動向につ



いて解説をしました。歴史的な背景だけでなく写真にまつわる物語を伝える事でより興味を持ってもらえると考え、事前に簡単なレジюмеを作成し内容を入れて臨みました。バウハウスに留学した日本人建築家の山脇巖（1898-1987）は夫婦での留学だった事やアレクサンドル・ロトチェンコ（1891-1956）の亡くなった後に残されたフィルムから作成されたポートフォリオ1冊分の作品を大阪市が所蔵している事など、展示作品にまつわる具体的なエピソードを話しました。実際に人前に立って説明をしてみると、早口になってしまったり、話すつもりの内容を飛ばしてしまうなど、色々と反省点がありましたが、とても貴重な体験になりました。

12月17日（日）：搬出作業日

前日に展覧会が終了し、淋しさを感じる暇もなく搬入作業と同じ業者の方によって次々と作品が壁から外されていきました。外された作品は研修生が大切に元の箱に納め、ひとつひとつリストと照合作業を行いました。確認された後、作品は大阪市とenoco（大阪府）とそれぞれの所蔵元へと無事に返却されて展覧会は終了しました。

（2）ピンホールカメラワークショップについて

企画が進んでゆく中で、展覧会の期間中に開催されるイベントを計画する事になりました。私は現代写真家の方をお呼びしての写真史についてのトークを提案しましたが、ワークショップ形式でのイベント企画を希望する方が多く、話し合いで子供向けのピンホールカメラのワークショップを開催する事に決定しました。

11月12日(日)、私たちが子供たちにピンホールカメラを教える為の、事前レクチャーが行われました。講師は大阪芸術大学の吉川直哉先生が担当して下さる事になり、実際に持ち寄った箱でカメラを制作し、野外での撮影、暗室での現像を行い、当日子供が作業する際の程度の時間が必要かなど検討を重ねました。また作業時間以外にも想定される問題(当日の天気、持参してもらった準備物が使用できない可能性、子供たちの安全に対するケアなど)を話し合い、シュミレーションをして当日に臨みました。



展覧会の会期中、3回のワークショップが開催される事が決まり、私は12月25日(土)に行われた初回分を担当しました。初回という事もあり、役割分担や時間配分などが予定通りに行くのか見当がつかないまま、子供さんと付き添いの保護者の受付が始まりました。最初はかなり緊張していたのですが、子供たちは少し目を離すと集中力が途切れてしまうので、対応に走り回るうちに緊張はとけ、参加の子供たちが作品を作る事に集中出来るように気を配りつつ、思い通りにできなかった子へのケアも出来たのではないかと思います。

ワークショップ中、撮影した印画紙を暗室で現像液に浸し、写した画像が浮き上がってきた時の子供たちの嬉しそうな顔は、何よりだったと思いますし、特に印象深かったのは、お父さんと娘さんとで参加された親子が、自分たちの顔を一緒に撮ったものが上手く仕上がり、後で来られたお母さん共々「思い出になります!」と喜んでくださったのは本当に嬉しい出来事でした。出来上がった作品は、enocoの方が後日スキャナーで取り込み、ネガ像からポジ像に反転させたものをプリントして展覧会場の入り口付近で展示が行われました。ワークショップの準備は大変でしたが、学校以外の学びの場として、とても有効なものになったのではないかと思います。



(3) 研修を振り返って

参加にあたり、社会人学生の私は他の学生の方と年齢がかなり離れている為、上手くやっ
ていけるのかという不安もありましたが、他の学生の方達は情熱を持って企画に取り組ん
でいて、共通の目標に向かって準備を進める事ができました。実際に作業を進めていく過程
では、時間の制約も多く全ての研修に参加が出来なかったり、企画書作りが捗らなかつたり
と苦勞の連続でしたが、担当して下さった学芸員の方の助言を受けながら、ひとつひとつの
課題を解決し「学生がつくる展覧会」という大きな企画を成し遂げる事ができたのではない
かと思います。

また別の視点になりますが、初期の段階で、展示する作品のセレクト用リストを配布され、
大阪市と府が多くの芸術写真作品を保有している事と、そのコレクションの質の高さに驚
きました。写真史上とても重要な作品がリストの中にはあり、それらの中から自分たちが展
示作品を選ぶ事ができるのは夢の様な話で、展覧会を通じてとても貴重な経験をさせても
らったと思います。



今回スペースの関係で
展示する事のできなかつた素晴らしい作品
がまだまだ数多くあり、2021年度中の
オープンを目指す新美術館において、これ
らの作品がたくさんの方に披露され、親し
みやすく開かれた場所として大阪の文化芸
術振興の拠点になればと思いました。

最後になりますが、このインターン研修
に参加した事で美術館の仕事の一端を垣間
見る事が出来ました。美術館所蔵の作品を使ってひとつの展覧会を作る為には、人々を魅了
する企画力と多くの時間と労力が必要で、学芸員の方たちは膨大な業務をこなしながら、そ
の為に日々努力をされている事も分かりました。また所蔵されている美術品はとても大切
に保管されていて、美術館や博物館での文化資料の保存学に関心があるので、芸術の中でも
比較的新しい分野である芸術写真の保存という観点でもとても興味深い活動になりました。
今回の展覧会は芸術を学ぶ学生として本当に得難い経験となり、今後の大学での学びと創
作活動への大きな糧になりました。